

令和6年3月22日

陸前高田市議会議長 及 川 修 一 様

教育民生常任委員会

委員長 佐々木 一 義

令和5年度 管外行政視察報告

教育民生常任委員会の管外行政視察の概要を下記のとおり報告いたします。

記

1 期 間 令和6年2月7日（水）から令和6年2月9日（金）まで

2 行政視察地及び研修項目

(1) NPO法人しげまさ子ども食堂（大分県豊後大野市）

子どもを中心にした地域づくりについて

(2) 大分県竹田市（人口19,293人 世帯数9,765世帯 R6.2.1現在）

幼保小の架け橋期プログラムについて

(3) 大分県立美術館（大分県大分市）

社会教育施設視察

3 出席委員等	委員長 佐々木 一 義	副委員長 大 坪 涼 子
	委 員 佐々木 良 麻	委 員 菅 野 広 紀
	委 員 福 田 利 喜	委 員 伊 藤 明 彦
	随 行 大和田 奈緒子（主査）	

4 行政視察概要 別紙報告書のとおり

教育民生常任委員会行政視察報告

教育民生常任委員会は、NPO法人しげまさ子ども食堂（大分県豊後大野市）、大分県竹田市及び大分県立美術館（大分県大分市）において行政視察を行いました。

ONPO法人しげまさ子ども食堂(大分県豊後大野市)

「子どもを中心にした地域づくりについて」

【概要】

しげまさ子ども食堂は、2016年に任意団体として立ち上げ、2018年からはNPO法人として旧三重高校重政農場跡地で活動しており「子どもたちを真ん中に、企業や行政及び子育て支援団体などの様々な団体とつながりながら、地域の大人が協力し合い、「子どもたちのための活動とする」ことを目指し活動している。

豊後大野市と連携した市内の子育て世帯への「配食事業」、地域で子どもの居場所を増やす活動の「ぶんごおおのキラキラ広場」、学校で朝食支援を行う「カムカム食堂」、学習・生活支援を中心とした放課後の居場所「しげまさげんき広場」など複数の事業を実施している（子ども食堂は毎月2回、学習支援は週2回等）。

また、地域の子どもが、自分の考えや思いを発信・表現しながら「自分たちで地域を作っていく」ことにも力を入れており、毎年2回のプレゼン、舞台パフォーマンス並びに地域のつながりを生かした「しげまさ食育活動（大分県食育事業）」も行っている。

【所感】

子ども食堂と言えば貧困対策のイメージが強かったが、ここでは月2回、誰でも来やすい雰囲気にしており、子ども一人でも訪れることが出来る食堂になっている。また、週2回のボランティアでの学習支援も好評である。さらに月2回、広大な旧高校農場跡地を利用し思いっきり外遊びが出来る場所の提供など、これら複数事業の展開は、まさに、子ども中心の考えとしての活動であった。子どもそれぞれの気持ち・状況に寄り添った支援を行うためには、選択性のある事業が必要であることを実感した。

一方で、子ども食堂の運営に係る課題として、資金調達を挙げていた。

2023年の助成金（県や市などの行政、民間）は総額で9事業27,060,400円で、民間事業には補助年限等様々な制約があるため、人件費については各種事業において人件

費が認められたものののみ支払い、その他は完全ボランティアとのことであった。

施設面など恵まれた面もあるが自己資金の調達など苦勞も見られ、完全ボランティアでの運営には疲弊も伴っており、地域として子ども居場所を複数提供していくためには、安定的な運営財源の確保が必要であると感じた。

これらのとおり「支援を行う」事は、その運営に関する資金調達知識が求められることから、事務代行を行う中間支援団体のあり方を含めた環境整備も必要であると考えたところである。

本市は、学童保育やスポ少など子育て環境の違いから、一概に同じような導入が出来るとは言えない部分もあるが、「子ども中心とした支援を行う」という事に関し、この視察を通じて得たことを活かしていきたいと感じた視察であった。

○大分県竹田市

「幼保小の架け橋期プログラムについて」

【概要】

文部科学省の「幼保小架け橋プログラム」が令和4年から3か年程度を期間として実施されているが、竹田市は、九州で唯一のモデル地域として、市立南部小学校と南部幼稚園を対象に事業を展開している。幼保小の全職員参加のアンケートから「竹田市のめざす子ども像」を設定し、「子どもたちの姿」という共通言語で域内の職員が繋がり意見交流している。

小学校の授業参観や保育参観で実際の子どもの姿から幼保小職員が分類し、参加者全員のワークショップで発現要因を分析・検証、その結果は、幼児教育センター指導主事、スーパーバイザー及び大学教授とともに評価している。

また、小規模自治体の強みとして関係職員全員参加の合同研修会が可能であることを挙げており、加えて、プログラムは公立幼稚園及び小学校の主管課の学校教育課と幼児教育施設主管課の社会福祉課が連携する必要があることから、研究2年目にしてより強い繋がり確立している。

さらに、学校教育課では体づくりに関わる作業療法士（5才児フォロー相談会で連携）を幼児教育施設へ派遣し、社会福祉課では幼児教育アドバイザーの設置に向けた予算化も進んできている。これらの取組は、子どもたちの「机に座ってられない」状況を減らし、教員の指示ではなく子どもたちの主体的な意見から学習がスタートできるなど、子どもたちが安心し、落ち着き、集中して、学習に向かう姿に繋がってい

る。

【所感】

竹田市架け橋期カリキュラム（南部幼小モデルプラン）は、文部科学省の事業を導入して行っており、市立南部小学校と南部幼稚園を対象にモデル事業を展開している。

令和3年に公立小学校教諭等幼児教育施設派遣研修事業を行ったことが国庫補助事業として選定されたもので、現在は、南部幼小モデルとして市内の民間施設を含んだ施設（私立・私立幼稚園）へ広めており、行政内部は教育委員会と福祉部の関連課係との連携事業として進めている。

研修には学校や施設の「代表者」が受講するのではなく、小学校の教員150名、幼稚園教諭50人が一堂に会して「全員」が受講することにより同一の情報が行きわたる工夫がなされ、幼稚園と小学校の教職員は子どもたちの姿という共通言語をもって意見交換を行っている。

もう一つの特色として、理学療法士・作業療法士などの専門家の活用が見られた。

小1プロブレムには、体力が関係しており、体づくりを重視してカリキュラム作成を行ない、独自の「タケタン体操」の実施や作業療法士のアドバイスを取り入れていた。机に座ってられない状況を引き起こすのは、集中力などの問題だと考えていたが、その根本には、体づくりが必要であることは大きな学びであった。

専門家派遣事業は、療育に詳しい大分市や市内の病院とも連携を行っており、この方々は検証委員会委員としても参加され、その後のカリキュラムの作成等にも加わっているとのことであった。

専門的かつ多視覚的な見方が出来ることや、身体面・発達面での早期対応による教育目的をはじめとした効果などについては、本市においても小学校低学年への専門家活用事業を取り入れるべきと感じた。

また、専門家を足掛かりとした連携強化でカリキュラム理解にも繋がったとの話もあり、本市においても参考になる手法だと考える。なお、保育園との連携については、その特徴から現行では難しく、遊び体験を重視しその先に小学校の生活科授業につなげたいと考えているとのことであった。

本市においても「保小スムーズコネクトプログラム」が実施されている。

本市は幼稚園がないことから一概に幼小連携事業の導入は難しいが、専門家の派遣や活用、カリキュラムの作成や検証、課題の共有や連携強化の手法など、明日にでも

導入できる施策を学べたことは大変有意義な視察であった。

○大分県立美術館 OPAM

「社会教育施設視察」

【概要】

2015 年 4 月 24 日、大分県大分市に「出会いと五感のミュージアム」をコンセプトに開館。設計は、坂 茂 氏（プリツカー賞受賞者）。大分県立芸術会館（2015 年 3 月 31 日に閉館）が 37 年間にわたり収集してきた約 5,000 点作品や資料を引き継いでいる。「街に開かれた美術館」として、透明度の高い、フレキシブルで可変性に富んだ空間になっている。1 階はガラスで囲まれた開放的なアトリウム、3 階は大分県産杉を利用した格子の天井、外観は大分の伝統工芸の竹工芸をイメージさせる造りとなっている。また、「全身で美術を楽しむ」ためのユニークな教育普及事業として、ワークショップの開催や、学校などでのアウトリーチプログラム、親子でも楽しめる展覧会などが数多く行われている。

【所感】

大分県立美術館 OPAM は、普段美術館に行かない人たちをいかに引き寄せるか、そして美術を楽しんでもらい、何度も日常的に足を運ぶような美術館にすることをテーマに設計したとのことで、美術館と街とが一体化していた。

また、開放感があるフリースペースや小さな子どもも楽しみながら学べるコーナー、多様な教育普及事業が開催されており、新たな発見の喜びを経験・実感することは、多くの県民・観光客が訪れる賑わいあふれる施設に肝要であると認識した。